

マオリ、日本的タトゥーを入れる

深山 直子

学生時代より、ニュージーランドの最大都市オークランドを拠点に、先住民マオリに関して調査研究を続けている。2023年3月、コロナ禍が緩和したために、3年ぶりにオークランドにて長年近い関係にあるファーナウ（マオリ語で拡大家族）に再会することが叶った。

成田からオークランドへの直行便は、朝に到着する。空港にだいたいファーナウの誰かが車で迎えに来てくれる。私が調査期間中に居候する家に向かう前に、朝食をとるためにコーヒーショップに向かうのが、お決まりのコースだ。「姉」たちに連れていかれたコーヒーショップでは、30歳前後の「姪」とコロナ禍期間中に生まれた「姪」の子が待っていてくれて、より一層感慨深いものがあった。それぞれにオーダーしたメニューを待っている間、子をあやししながら「姪」が軽い感じで唐突に、「明日、タトゥー店を予約したよ。みんなで行くからね」と言い放った。私は驚いて、「え、なんのこと？」と聞き返す。だが、実は以前にもタトゥーの誘いを受けたことがあった。その度に日本ではまだ一般的ではないとか、痛いのは嫌だとか、公衆浴場に行きづらくなるとか理由を付けて断っていたのだった。

オセアニアは伝統的に、広くタトゥー文化があることで知られている。マオリ社会では、固有のタトゥーのことをター・モコあるいはモコという。イギリスの植民地化によって衰退を余儀なくされたが、1970年代以降に文化復興が進み、近年はその方法や意味などが変容しながらも再びター・モコが活性化している。現代ニュージーランドは、ター・モコに加えて、その他ポリネシア系のタトゥー、あるいは欧米系のタトゥーなど、複数の系統のタトゥー文化が並存しているところといえよう。特に若者の間では、タトゥーを入れることは一般的で、カジュアルに個人の判断で行われることが多い。このファーナウやその親族においても、20代から50代ぐらいのメンバーの多くは、体のどこかにタトゥーが入っている。そのデザインは、曲線が特徴的なター・モコならではのもの、飾り文字の言葉、ユニコーンや木やきのこ、アニメのキャラクターなど、多様だ。

「姪」の話をもっと聞いていくと、今回予約したのは、オークランド中心部に所在するタトゥー店で仕事をする人気の日本人タトゥーイストで、「姪」、私と同年代の「姉」、「妹」そして私の4人分を依頼したという。話が具体的であることに焦る私を前に、「姪」が笑いながらも真剣な様子で「これはファーナウの絆を強めるためのイベント、みんなで日本のタト

ゥーを入れるよ！」というようなことを、まくしたてた。

その後、家に移動してからも、私への説得は続いた。このファーナウとその日本人タトゥーイストの出会い、半年前に遡る。「姪」のサモア系のパートナーが、タトゥー店に飛び込みで入った際にこの日本人タトゥーイストに出会い、腕に日本的タトゥーを入れることになったという。「姪」たちは彼の腕のタトゥーをみて、その技術の高さ、デザインのエキゾチックさに魅了されて、自分たちも同じタトゥーイストに入れてもらおうと考えたのだろう。だが私が3年ぶりにやってくるということで、話は軌道修正されたとみえて、ファーナウに日本人がいるから、ファーナウの証としてみなで日本人タトゥーイストから本物の日本的タトゥーを入れるのだ、という話になっていた。私、そして日本文化が、彼女らにここまで「刻み込まれ」ている／ることに感動を覚える一方で、彼女らの誘いを受け入れられないことに、私は再会初日にもかかわらず、困り果てていた。その横で、彼女ら3人は嬉々として、どんなデザインを依頼するのか、スマホを片手に画像検索をしながら盛り上がっている。どうしてそれを希望するに至ったのかわからないが、「姉」は沖縄のシーサーをモチーフにしたデザイン、「妹」は鯉および鶴それぞれの写實的デザインと折り紙のデザイン、「姪」もまた鶴の折り紙デザインを、腕に入れることに決めていた。タトゥーのことなんてまるで知らないが、ファーナウに「誤った」デザインを入れさせるわけにはいかないから、私にもわか日本人代表としてスマホで調べながら、口をあいている雄のシーサーは右側だとか、鯉は登り鯉というからこの向きがよかろうとか、折り紙の柄に桜の花模様はありうるとか、もっともらしくアドバイスしてみる。他方彼女らは隙あらば私に、何を入れるのか、どこに入れるのか、と尋ね、小さいデザインならばいいだろう、見えにくいところならどうだ、と説得の手を緩めない。そのしつこさに、いっそもう入れてしまおうか、と心が揺らいだが、やはり世間体や家族・友人の評価を恐れているのだろうか、他人のタトゥーはどうも思わないが自分がタトゥーを入れることはできないと感じ、場がしらけることを申し訳なく思いながらも、固辞し続けたのだった。

翌朝、3人のマオリ女性と私は車でオークランド中心部に向かった。私はようやく、彼女たちをなんとか納得させて、あくまで見学人という立場だ。開店を待って入店し、1人ずつタトゥーを入れてもらっている間、他の3人は店の周辺を歩いたり、店のソファでゲームしたり軽食を食べたりして、いらつくことなくひたすらに待っていた。それぞれのタトゥーはほぼ単色でワンポイントと呼べる程度のサイズであったので、所要時間はひとり1時間半から2時間ほどに留まったが、なんせ3人もいたので、結局夕方までそこで過ごすはめ

になった。私は暇を持て余していたから、機械を手に淡々と正確に作業を進める日本人タトゥーイストと、だいぶおしゃべりもした。日本、オーストラリア、そしてニュージーランドで仕事をしてきたベテランのタトゥーイストで、彼の半生もまたドラマチックであった。

かくして、3人の腕にはそれぞれ、新たに日本的タトゥーが刻み込まれた。彼女らの体には今、ター・モコ、欧米系タトゥー、「無国籍」的タトゥー、そして日本的タトゥーが隣り合っている。そのことに、海を越えて広がるタトゥー文化が映し出されていると同時に、海を越えて通い続ける私が多少なりとも関わっているということで、なんとも複雑で消化しきれない思いを抱えている。

(ふかやま・なおこ 東京都立大学)